なっても』というタイトルで柏樹社から一九八一年に出版されている）

☆福島　智『渡辺荘の宇宙人』、素朴社、一九九五年刊

私たちの未来を探し求めて

小林　瑠以

私が紹介するのは、『今、赤ちゃんが危ない―母子密着育児の崩壊』（田口恒夫、自費出版、二〇〇〇年）（注）と『子どもの心と言葉を育てる本』（田口恒夫、リヨン社、発売・二見書房、二〇〇〇年）の二冊である。

前者は田口自身によって書かれたもので、後者は、木山悳世が三年間田口のもとに通って田口が話したものをまとめたものであるが、それぞれに別の良さがあるから両方読むことをお薦めしたい。

田口恒夫（一九二四～）は、日本における言語障

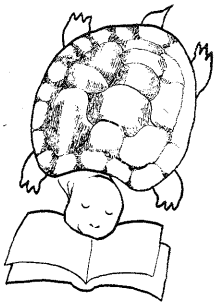
害治療のパイオニアである。田口は、機能障害がないにもかかわらず、普通に言葉を話すようにならない子どもたちの出現に、言葉は「関係」ではないかと考え、言葉を話さない時期に形成される母子の絆の意味を考えた。十数年前からは、栃木県で自給自足を目指した百姓の暮らしをしている。

田口は、『今、赤ちゃんが危ない』で、人間の心の発達の根幹部分が形作られるこの時期の大切さと、母子が密着してこの時期を過ごすことの大切さを伝えたくてこの本を書いた、と言っているが、私は、言っていることは子育てであっても、田口は子育てをはるかに越えるものを見ているような気がしてならない。

田口は、子育てを言うにあたって、ひとつのことしか言わない。例えば田口の次のような母親、父親へのメッセージにそれが表れている。「蓄積した教養や世間体などというばかげた常識をかなぐり捨て、子どもを包みこんであげてください。それだけです。そんなことをバカのひとつ覚えのように言っているオヤジがいたなあと、思いだしていただければ、それで十分です。」(『子どもの心と言葉を育てる本』)。このような表現は、田口のものごとの核心を感じ取る力、つかみ取る力の強さなのではないだろうか。

言葉を話さない時期に形成される母子の絆が人間の心の根幹だとする田口の視点からは、これまで見えなかったものが見える。

『今、赤ちゃんが危ない』には「ほんとうの勇気、ほんものの愛国心」と題された文章がある。(『子どもの心と……』にも、同様の記述がある)



この文章では、太平洋戦争末期の特攻の学生たちを題材に、勇気とは何かということが論じられている。田口自身も、かつて、海軍飛行予備学生であった。田口は、次のように言っている。

特攻隊員となるべく訓練を受けていた自分も周りも、それまでは、みんなただの腰抜け学生だった。本土が日夜空襲にさらされる危機的状況の中で、故郷に残した母や姉を守るのは自分しかいない、と思った時に、ひとりの臆病な学生は一変した。勇気とは、自分のかけがいのない人が危ないというような状況に直面した時の、やさしさである。そのやさしさのもとは、生まれてすぐの母子関係に端を発する他者との太い絆である。

私は特攻に関する本を何冊も読んだことがある。それは、たまたま、小田野正之（一九二三～一九九七）という私の音大時代の声楽の恩師が、数少ない特攻の生き残りであったからである。小田野は、今の時代の軽さのようなものに身を置けない私が、深い安堵を覚えることができた稀な人である。私は、私が通じ合うことのできる相手が何故特攻の生き残りなのか、どうしても知りたかった。

しかし、いくら特攻に関する本を読んでも、やはり戦後生まれの私には、特攻の学生たちは理解できなかった。私には、特攻の学生たちが言葉による理解を越えた存在に思われた。しかし、田口の「ほんとうの勇気……」を読んで、そうではないことが分かった。

人は、想像を絶する危機に出会ってもなお、他者との強い絆を意識できれば、誇りを失わず危機に立ち向うことができる。そのことを体現したのが特攻の学生たちだったのではないか。

特攻の学生たちと戦後生まれの私では、生きている状況はあまりにも違う。それは越えるには高すぎる壁であるように感じてきたが、彼らの心にある

ものが誰の心にもある人間としての普遍であることが分かった時、その壁はもはや壁でなくなってしまった。

言葉もしゃべらない時期の母子の絆こそ人間の心の根幹だという田口の視点からは、時代の壁を越えたものが浮かび上がる。

田口は、表面に現れた行動としての勇気の奥にあるものをとらえた。勇気とは何かと問いかけることは、人の心の根幹部分に何があるのかと問いかけることと同じであった。田口が問いかけているのは、結局人間とは何かという問題なのではないだろうか。それが、田口の視点が持つはかり知れない可能性なのではないだろうか。

「居心地のいい家族以上に大切なものなんてない」（『子どもの心と言葉を育てる本』）という言葉にも、感動を覚えた。私は、仕事は細々としかやっておらず、「家庭がほとんどすべて」であるような生活をしている。これは、ひとえに自分の人生を自分で選び取ってきた結果であるのだが、それでも、そのような自分に開き直ることは難しい。田口のこのような言葉には、感動する。

私たちの時代が、人類が一度も経験しなかった便利さや豊かさを実現した一方さまざまな問題を抱えてしまったことは、今や誰もが、多かれ少なかれ感じているのではないだろうか。

例えば、自然はもはや当たり前のようにそこにあるものではなく、意識して守るものになってしまった。突き詰めれば、人間だって同じなのではないだろうか。人がいれば人の暮らしがあり人情があるといった時代は、もう過去のもので、人が人間らしくあるためには、何が人間らしさなのか、考えて取り戻すような時代を、我々は生きているのではないか。

田口のとらえたもの、それは、人間がこれから先

長い時間をかけて、ほかならぬ人間自身をとらえ直すための出発点なのではないか。（音楽教室主宰）

注　なずな出版（電話・〇三―三二六一―七二九一）が取り扱っている。

「健康」再考

首藤　美香子

さあ、夏休み。解放感でいっぱいの子ども達に対して、親や保育者が真っ先に口にすることといえば、「早寝早起き」「規則正しい生活をしよう」「海や山など自然の中で思いっきり遊んでみよう」「真夏の太陽の下で身体を鍛えて元気で丈夫になろう」といった言葉ではないだろうか。冷房の効いた室内でゲームに没頭するなんてもってのほかとばかり、朝早くから小学生と共に飛び起きてラジオ体操の列